

# 知名町埋蔵文化財分布調査概報

— 昭和 60 年度 —

1986年3月

鹿児島県大島郡知名町教育委員会

## 序 文

本町教育委員会においては、県営農業基盤整備事業の推進、また、土地所有者による開発が予想されるので、埋蔵文化財包蔵地を保護するため、分布調査を実施しました。

本報告書は、これまで調査された遺跡に本年度の調査で確認した埋蔵文化財包蔵地を加えて作成しました。

また、用語・土器形式などについてわかりやすく解説し、一般の方々に理解できるようまとめております。

本書を文化財保護と郷土学習の資料として活用していただければ幸いです。

発刊にあたり県教育庁文化課文化財研究員戸崎勝洋・主事牛ノ浜修の両者に多大な御指導をいただきました。深く感謝の意を表する次第であります。

昭和 61 年 3 月

知名町教育委員会

教育長 平 良 清 義

## 例　　言

1. 本書は、昭和60年度に実施した知名町埋蔵文化財分布調査の概報である。
2. 調査の組織は、調査の経過の中で記した。
3. 本書の遺物番号は、遺跡別に記した。
4. 本書の執筆および編集は、戸崎、牛ノ浜、大山が行った。

## 目 次

### 序 文

### 例 言

第1章 序 説	4
第1節 調査に至るまでの経過	4
第2節 調査の組織	4
第2章 知名町の環境と古代	5
第3章 地形・地質	6
第4章 遺跡の概要	9
1. 中甫洞穴	9
2. 赤嶺原遺跡	10
3. 花城洞穴	11
4. 石原遺跡	12
5. イクサイヨー洞穴	15
6. 芦清良前金久遺跡	16
7. 塩津類ビ遺跡	17
8. 泊り原遺跡	18
9. 川春遺跡	19
10. 屋子母遺跡	20
11. 当ノ増遺跡	22
12. 大津勘フーダトゥ遺跡	23
13. 大津勘フバド遺跡	24
14. スセン當貝塚	26
15. 神野貝塚	27
16. 木部蘭迫遺跡	28
17. 住吉貝塚	29
18. 友留遺跡	33
19. 手殿遺跡	34
20. 正名内間遺跡	35
21. 志良辺当遺跡	36
22. 田皆伊美畠遺跡	37
23. アンギム遺跡	38
24. 永良部洞穴	39
第5章 用語解説	42
第6章 知名町の考古学文献目録	45

# 第 1 章 序 説

## 第1節 調査に至るまでの経過

知名町教育委員会では、埋蔵文化財の保護、活用を図るために、関係各課とその有無について協議し、諸開発との調整を行っている。

本町において、「県営畠地総合改良事業」および土地所有者による大規模な開発が進められており、埋蔵文化財包蔵地の保護に危惧の念をいだく。

そこで知名町教育委員会では、遺跡の性格、範囲を確認する目的で分布調査を企画し、昭和60年4月、鹿児島県教育委員会文化課と協議し、調査を依頼した。

分布調査は、昭和60年5月20日から同月24日までの5日間実施した。調査は町内全域を対象としたが、限られた僅かな日数で周知の遺跡周辺と洞穴を中心に行ない、その他は未調査となっている。

分布調査と併行して中央公民館郷土資料室に保管されている考古資料の写真撮影も実施し、特筆すべき資料については、県教育委員会文化課で整理図化した。

## 第2節 調査の組織

調査主体者 知名町教育委員会

調査責任者 タ 教育長 平良 清義

タ 社会教育課長 神川 一郎

調査企画 タ 主事 大山 優

調査担当 鹿児島県教育委員会文化課 文化財研究員 戸崎 勝洋

タ 主事 牛ノ浜 修

知名町教育委員会 タ 大山 優

調査事務 タ 社会教育課長 神川 一郎

タ 主事 大山 優

大當 末子

整理作業員

河野 陽子・岩坪千枝子

## 第 2 章 知名町の環境と古代

沖永良部島は、第3章の地形、地質で記述するとおり、鹿児島から南へ約542kmに位置する隆起さんご礁の平坦な地形を呈する島嶼である。

このような地形を呈するため河川の発達は乏しく、湧水点も段丘境や海岸に片寄っている。

したがって、古代から生活の場も限定されたもののように、知名町内の24ヶ所の遺跡も、海岸部や丘陵先端部、鍾乳洞内に多く立地している。

ところで、知名町内の遺跡が考古学的研究の対象となったのは1957年（昭32）、河口貞徳氏が住吉貝塚を発掘調査したのが始まりである。

河口貞徳氏は、九学会連合奄美大島共同調査（第3次）の考古班として、分布調査と住吉貝塚の発掘を実施し、多くの成果を得られた。調査結果によると土器や石器等のほかに、石組住居跡が発見された。この住居跡は内径縦2.4m、横1.8mの長方形で、北隅及び北西部は石を並べ、他は自然のさんご礁石を調整したものである。時期は宇宿上層式の時期である。

1972年（昭47）には、鹿児島短期大学南日本文化研究所による総合調査（考古一白木原和美・上村俊雄）も実施され、10ヶ所の遺跡地が発見、報告されている。また、三島格、高宮廣衛、島袋洋の各氏も来島され、調査を実施された。

1981年（昭56）になると、隣接する和泊町誌執筆の依頼を受けた河口貞徳氏は、知名町久志検水廻所在の中甫洞穴出土の採集品の中に爪形文土器があることに注目された。これをきっかけに、1981年、1982年（昭57）、1983（昭58）の3次に亘る発掘調査が実施された。（2、3次は知名町教育委員会が調査主体者）

調査の結果、洞穴内より人骨、土器、石器等が出土したが、出土した土器のうち爪形文土器は、縄文の草創期に比定されるもので、知名町における先史時代は一挙にさかのぼり、本島最古の土器となった。

一方、1981年（昭56）、1982年（昭57）には、鹿児島大学、沖縄国際大学によりスセン當貝塚、神野貝塚の発掘調査も行われた。

また、1985年（昭60）には、県営圃場整備事業に伴って、赤嶺原遺跡の確認調査が知名町教育委員会が調査主体となって実施された。なお、1984年（昭59）には、地元の大山倭氏により、イクサイヨー洞穴が発見され、貝輪、土器等が採集された。

以上の調査例から、知名町は縄文の草創期より中世から近世にかけての遺跡が存在し、長く人々の生活の場であることが立証された。

また、当時の人々の生活は、前述したように、海岸部や段丘縁辺部、あるいは洞穴内という一定の地域に限られた所を生活の場としていることも、知名町の先史時代の特徴の1つであろうし、これら先史時代の遺跡のほか、赤嶺のアーニマガヤといったトフル墓や城等も所在しており、先史時代の遺跡とともに、貴重な歴史の証である。

## 第3章 地形・地質

### (1) 地 形

知名町は鹿児島から南へ542キロメートルに位置し、東北に和泊町と隣接し、南方には太平洋を隔てて与論島や沖縄本島が望まれ、北は東支那海に面している。

沖永良部島は比較的平坦な島で標高246メートルの大山を中心としてその大部分を第四紀琉球層群に覆われたカルスト地形を呈している。

南北両海岸線ではその性格が対称的で南岸線では凸形を示すのに対し、北岸線は凹形を示し海食崖が連続してよく発達している。これは島がモンスーン（季節風）帯に位置しているためである。海食崖の後退が進んだ部分では砂浜となっており、谷の前面部にあたる所にはビーチロックを発達させている。

大山を中心とする高位段丘と中位段丘面との境界付近100メートル～130メートルまで急斜面は特徴的で、この斜面下には各所に湧水が発達している。例えば水連洞、イジンギョ、ユガキヨ、ニヤートゴウなどがこの好例である。

また、中位段丘と低位段丘の標高60メートル～40メートルにも急斜地形が発達し、浸食が進んだ部分はあるいはドリーネの底部などいたるところに湧水、暗川、横穴が知られている。

これらは古くから島の人々の水源として利用されており、水量に応じて大小の集落が発達している。この例として田皆暗川、住吉暗川、大津勘暗川、黒貫暗川などこれである。

これに対して表流河川は1つあるのみで、知名町と和泊町の境界付近を流れる余多川がそれである。この余多川は付近の湧水、暗川からの補給があり比較的安定した水量を保っている。

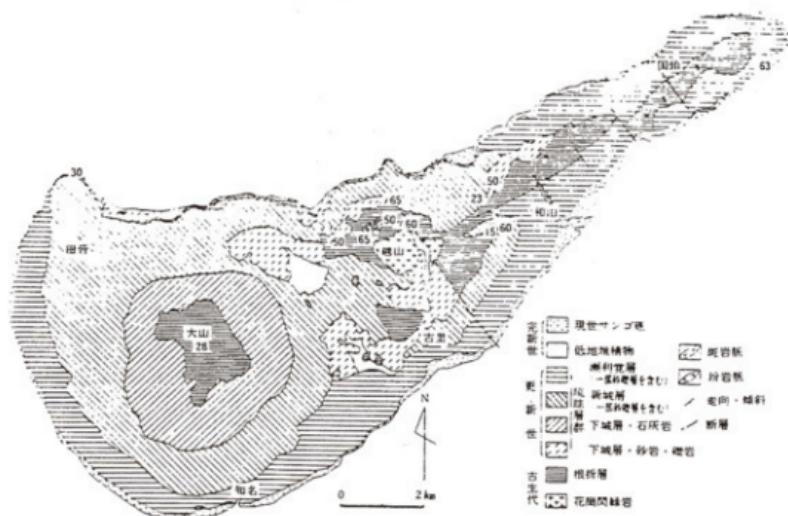
### (2) 地 質

南西諸島の地質に関してはこれまでに多くの研究報告、新知見が発表されてきているが、その中で特筆されることは南西諸島を通じて第四系は隆起さんご石灰岩を主とし、完新世においても南部では環礁、堡礁を発達させ北部では堡礁、裾礁を発達させている。

沖永良部島の完新世では典型的な裾礁を発達させ美しい海岸風景を形成している。これら隆起さんご石灰岩（琉球層群）の基盤地質は先第三系（古生界より古第三系）、新第三系等により構成され、その配列に特徴的な累帶構造をもっており、この帶状構造は現世の地形と密接な関係

沖永良部島における層序区分

時代	地層名	層厚	岩相
完新世	現世堆積物		石灰岩・砂岩・礫・粘土
更新世	瀬利覚層	50～60m	石灰岩・砂岩・礫岩
	新城層	120m	礫岩（田皆巖岩部層）・石灰岩・砂岩・礫岩
	下城層	150m	石灰岩・砂岩・シルト質砂岩・礫岩
古生代	根折層	3,000m±土	凝灰岩・粘板岩・砂岩・輝綠岩
第三紀	貫入岩類		花崗閃綠岩・斑岩・玢岩・脈岩（根折層中に貫入）



沖永良部島地質図

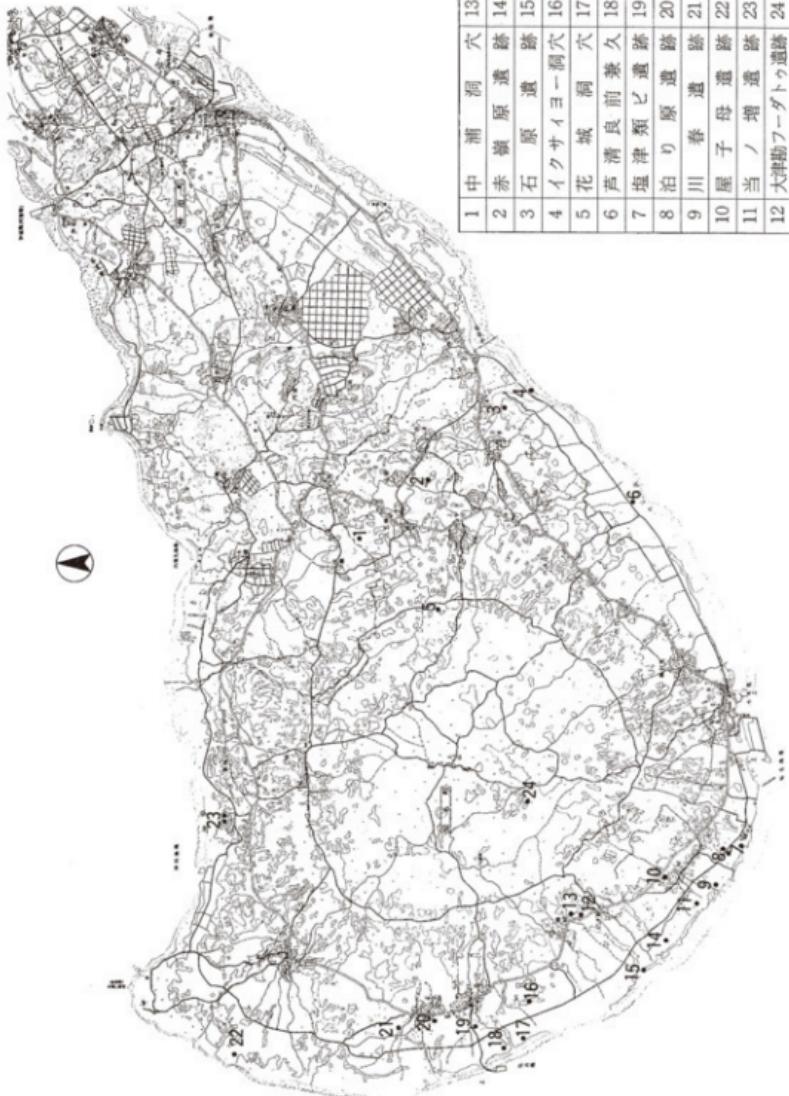
をもつてゐる。

この南西諸島の地質構造に関して小藤文次郎は三重層構造を発表している。すなわち、内側に火山質系列、中央に非火山質古期岩系列、外側に第三系列の発達であり、これらは背陵山脈の溺没したものであると論じた。その後、この事実は多くの研究者によって裏づけられ発展的研究が発表され今日に至っている。

沖永良部で発掘調査された遺跡は数少なく、昭和29年河口貞徳氏によって駒布わんじょうナーパンタの試掘を最初として、昭和32年九学会による知名町住吉貝塚の発掘調査、昭和57・58年鹿児島大学と沖縄国際大学による知名町スセン當貝塚・神野貝塚の発掘調査、昭和57・58・59年の中甫洞穴の発掘調査、昭和60年の赤嶺原遺跡の発掘調査にすぎない。

遺跡のほとんどは海岸線近くに立地し、時期も縄文時代後期以降に限られた觀があったが、内陸部に位置する中甫洞穴での爪形文土器・轟式土器やそれと相前後する土器群の発見によって状況は大きく変化しつつある。

知名町遺跡分布図



## 第 4 章 遺 跡 の 概 要

### (1) 中甫洞穴

中甫洞穴は知名町東北部の久志検水窪にあり、大山山頂より東々北3.56km、北部海岸線より2.2kmの内陸部に位置する。大山周辺に数多くみられるドリーネの一つで、径70m程度の崖地となり、付近にいくつかのドリーネをみることができる。

遺跡地は森林に覆われ、点々と石灰岩が露出しており、南東側と北西側の二ヶ所に地下の鍾乳洞へ通ずる洞穴が開口している。

南東側の洞穴は小規模で、特に開口部は狭く草木に遮られて見落す程であるが、北西部の洞穴は規模が大きく、いわゆる「中甫洞穴」と呼ばれるもので、南東方向へ大きく開口し、入口幅14m、奥行20m、天井の高さ5mである。洞穴の入口の上面には切り立った石灰岩壁が露呈し、その上部は森林で覆われ、洞穴の天井からは無数の鍾乳石が垂下し、床面には巨大な石灰岩がよこたわり小規模な石筍群がみられる。

洞穴の西よりには、洞穴の床面をなす巨大な石灰岩の下に大きな空隙があり、下方へ傾斜して地下の鍾乳洞へ通ずる斜坑を形成している。地下の鍾乳洞には水脈があって、北方向より南方向へ流れ、斜坑より南へは石灰岩の堆積で前進できないが、北側へは細長く洞穴が続いている、いずこの場所へ出られるらしいが確認していない。



中甫洞穴入口部

河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望「中甫洞穴」鹿児島考古17 1983

河口貞徳・本田道輝「中甫洞穴」知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1984

河口貞徳・本田道輝「中甫洞穴」知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1985

## (2) 赤嶺原遺跡

赤嶺原遺跡は、沖永良部島のほぼ中央部の知名町赤嶺原に所在する。

遺跡の所在するところは、余多川の支流竿津川によって四方が開析された独立丘状の頂上部及び縁辺部である。

この地域は、県営畠地総合改良事業（知名東部）の計画区域であったため、事前調査として分布調査を1982年（昭57）、県教育庁文化課で実施し、遺跡と判明したところである。

発掘調査は、知名町教育委員会が調査主体者となり、1985年（昭60）確認調査を実施した。

調査の結果、縄文から歴史時代までの土器等が出土したが、いずれも細片であり、遺物包含層もすでに削平されていた。

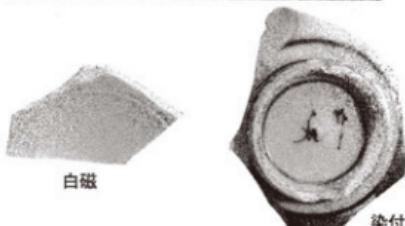
出土した遺物のうちで、内面に布目痕をもつ土器が出土したことは、布目痕土器の出土地が1ヶ所増加したことで注目された。



赤嶺原遺跡遠景



発掘風景



### (3) 花城洞穴

花城洞穴は沖永良部の南々東、知名町大字上平川字花城に所在し、大山周辺に多く見られるドリーネの一つで付近にいくつかのドリーネを見ることのできる内陸部の遺跡である。

遺跡地は森林に覆われ、石灰岩が点々と露出しており南西側と北東側に二ヶ所に地下の鍾乳洞へ通ずる洞穴が開口している。両洞穴とも規模は同じくらいであるが、北東側の洞穴の方が奥行が深く鍾乳石および石筍群が良く発達している。洞穴入口の上面には切りたった石灰岩壁が露出し、その上部は森林で覆われ遺跡を確認することは容易でない。

地下の鍾乳洞へ通ずる道は東西方向に急傾斜しており入口前面は石壁（自然石灰岩を補填する為に石積されている）がある。この洞穴には町水道課の簡易水道施設が設けられている。



花城洞穴入口部

### 遺物

花城洞穴内では土器、石器の遺物は採集できなかったが、入口から10m程はいりこんだ鍾乳洞の左側テラス部にゴホウラが置いてあった。ゴホウラには穿孔があり、貝器としての利用も考えられたが、時代を推定することはできなかった。

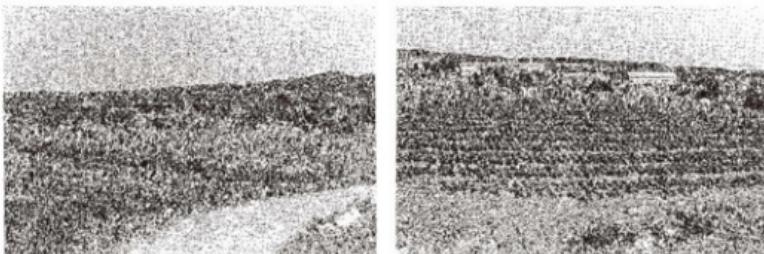
#### (4) 石原遺跡

石原遺跡は沖永良部島の中央部に位置し、知名町大字余多字石原に所在する。

本遺跡は昭和52年頃に中山清美氏（笠利町歴史民俗資料館勤務）によって発見された遺跡で内陸部の小高い丘陵地にある。

北西側に県立沖永良部高等学校を望み、その間を沖永良部唯一の表流水川である余多川が蛇行状に流れ太平洋にそぞいでいる。

遺跡は赤土層と黒土層とが明確に区別され、黒土層が遺物包含層であるが多量の土器が散布しており、地主の宗村道則氏によると転地替えをしたということで、遺跡の一部は破壊されたものと思われる。

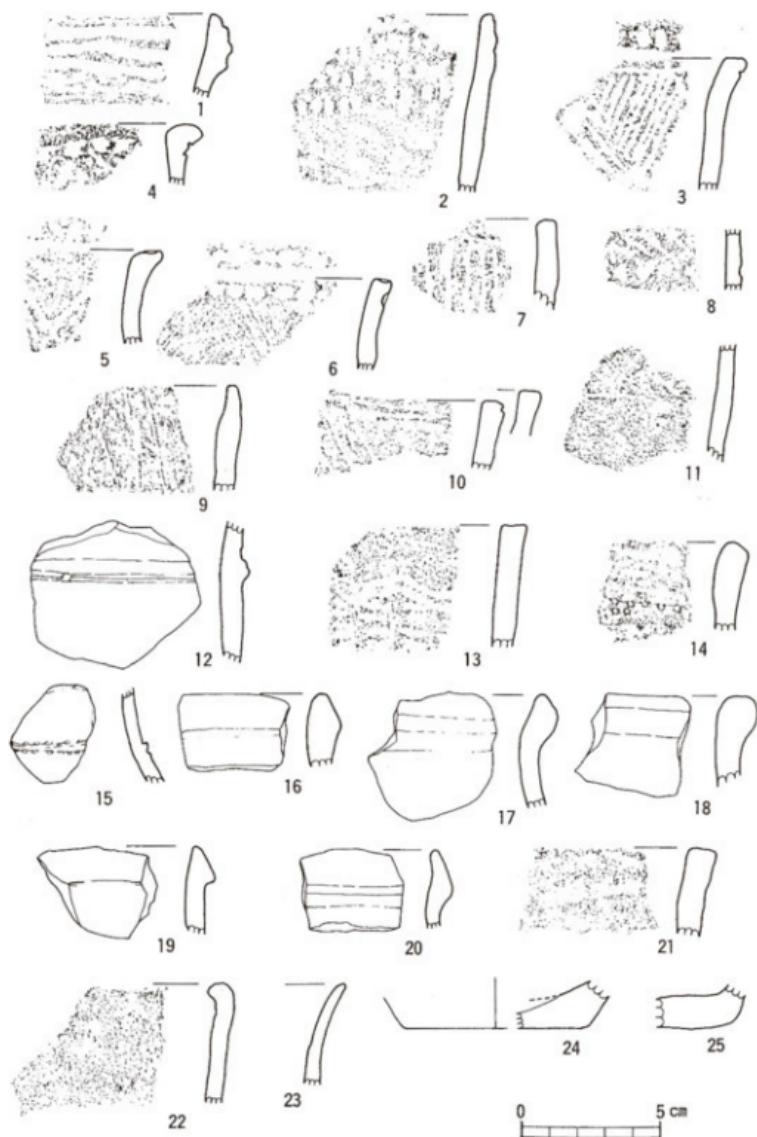


石原遺跡近景

昭和55年2月、沖縄国際大学の高宮廣衛氏、島袋洋氏、比嘉栄哲氏によって遺物が採集され、報告されている。遺物は、土器片37点、石器片8点である。土器は、宇宿下層式土器と宇佐浜式土器が報告されている。石器は閃緑岩製の磨製石斧と花崗閃緑岩製の磨石である。

今回は前から採集されていた遺物を図示した。

1は、ヘラ状施文具の押引きによる施文を施した面縦東洞式土器の口縁部である。色調は淡赤褐色を呈し、胎土には石英・金雲母・サンゴ粒を含んでいる。2は、二叉状文具の押圧を横位に廻らしたものである。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に石英・金雲母・サンゴ粒を含む。3は、口唇部に叉状施文具によって刻目を一列廻らし、口縁部には斜位の沈線を施している。茶褐色を呈し、胎土に、石英・金雲母を含んでいる。4は外に突きだした口唇部をもつもので、口唇部直下に二叉状施文具による押引きを一列廻らし、その下位に斜位に鋭いヘラ状施文具による沈線を施している。色調は赤褐色で、胎土に石英・金雲母・サンゴ粒を含んでいる。5も外に張り出した口唇部をもち、口唇部に刺突を一列施し、口縁部に斜位に沈線を施している。茶褐色を呈し、石英・金雲母・サンゴ粒を含んでいる。6は口唇部に一列、口唇部直下に刺突による列点を一条ずつ施し、口縁部に鋭利なヘラ状施文具によって斜位に5本の沈線を稜形状に施している。色調は外面が暗茶褐色で内面は暗褐色を呈し、胎土に石英・金雲母・サンゴ粒



石原遺跡採集遺物

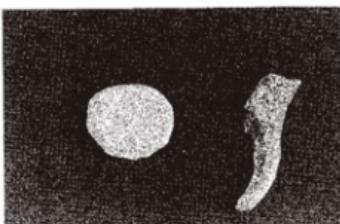
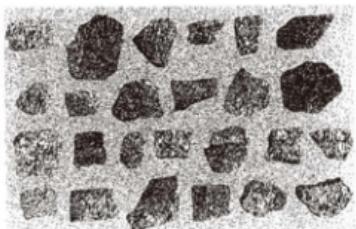


表 採 遺 物

を含んでいる。7も口縁部で、口縁部に縦位の沈線を施し、同施文具による沈線でワクぐみをしている。8も6同様列点と斜状に施された沈線で構成されている土器である。9・10は鋭いヘラ状施文具による沈線を斜位に施した土器の口縁部で嘉徳Ⅱ類土器である。石英・金雲母・サンゴ粒を含み、色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。11も同様である。12は貼り付け突帯をもつ土器である。暗茶褐色を呈し、胎土に石英・金雲母・サンゴ粒を含んでいる。13は2列のウェーブ状の沈線と横位に短い沈線を施す土器の口縁部である。色調は淡赤褐色を呈し、石英・金雲母・サンゴ粒を含んでいる。14・15は断面円形の弧状の貼り付け突帯を有し、上下に鋭いヘラ状施文具による刺突を加えたもので喜念Ⅰ式土器である。胎土に石英とサンゴ粒を含み金雲母は含んでいない。焼成は粗である。16～20は断面三角およびカマボコ状の口縁部をもつもので宇宿上層式と思われる。色調は淡赤褐色を呈し、胎土に石英・サンゴ粒を含み、18・20には金雲母が含まれる。22は内面に出っぱりをもつ口縁部である。石英・金雲母・サンゴ粒を多く含み、色調は暗茶褐色を呈す。22は外反する口縁をもつ土器である。色調は赤褐色を呈し、壺の口縁と思われる。24・25は底部である。胎土に石英・金雲母・サンゴ粒を含んでいる。

注)高宮廣衛・島袋洋「沖永良部島の先史遺物」

沖永良部島調査報告書(地域研究シリーズ No.2) 1981

### (5) イクサイヨー洞穴

本遺跡は沖永良部島の中央部、知名町大字余多字石嘉喜に所在する。遺跡地は森林に覆われ点々と石灰岩が露出しており、北西側と南島側の二カ所に地下の鍾乳洞へ通ずる洞穴が開口している。北西側の洞穴は小規模で特に開口部は狭く余多川がそばを流れている。

洞穴の全長は約200メートルで天井の高さは約1~2メートル程度で洞内には無数の鍾乳石、石筍群が垂下している。洞穴の中間部に支洞が確認できるが水位が高いため前進できなかった。

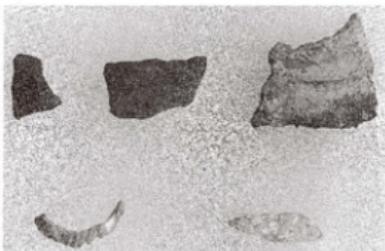
南東側の洞穴は規模が大きく、いわゆる「イクサイヨー洞穴」と呼ばれるもので、太平洋側へ面して大きく開口している。

この洞穴も森林に覆われ、巨大な石灰岩が横たわって容易に確認することができない。また、遺跡直下は断崖絶壁で海岸へ下りることは不可能である。

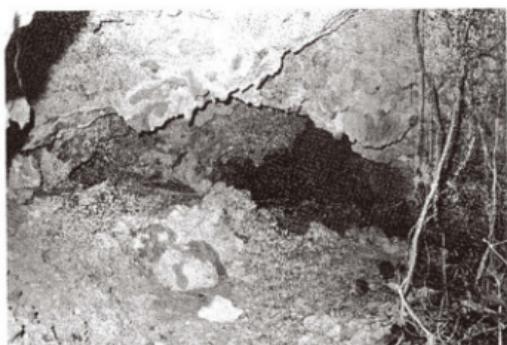
洞穴内には三ヶ所に柵段が設けられており、人骨などが散在しており、他に土器、貝輪、石斧などが採集された。



イクサイヨー洞穴遠景



表採遺物

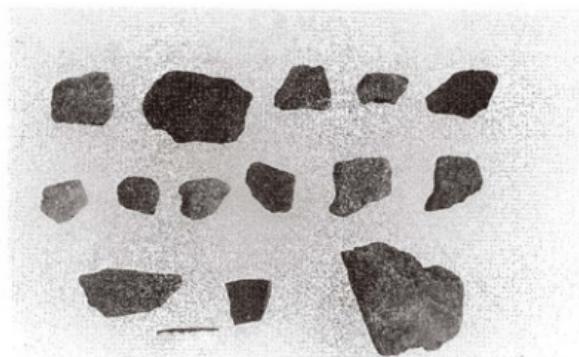


イクサイヨー洞穴近景

#### (6) 芦清良前金久遺跡

前金久遺跡は知名町の東部、知名町大字芦清良字前金久に所在し太平洋に面した海岸にある。遺跡直下はウジジ海岸と呼ばれ二つの奇岩が海面に仁王立ちしており、風景画、写真撮影などによく利用されるところである。また、南西側には明治23年にカナダの帆船がウジジ海岸東方で座礁破損し十名が死亡したと言われており、その墓地がソツ、アダンの自生している砂丘にある。

遺跡付近には湧水の出るところがあり、その水脈は上流では確認することはできないが、潮の干潮時には地表に湧出する。従って満潮時には一面が海水となる。流量は比較的豊富である。



芦清良前金久遺跡 表採遺物

遺跡は昭和55年2月沖縄国際大学の高宮廣衛氏、島袋洋氏、比嘉栄治氏によって発見されたもので、昭和56年報告されている。それによると、遺跡は砂丘上にあり、採土で大きく凹んでいる。その断面によると10cm前後の黒色土片がみられ、その下位より土器片が2点採集された。また周辺より「類須恵器」が採集されている。

注) 高宮廣衛・島袋洋『沖永良部島の先史遺物』

沖永良部島調査報告書〈地域研究シリーズNo 2〉 1981

#### (7) 塩津類ビ遺跡

塩津類ビ遺跡は沖永良部島の南々西、知名町大字屋子母字塩津類ビに所在する。遺跡は太平洋に面したサイクリング道路（屋子母～住吉間）沿いにある。

遺跡の海岸側には防風林が植樹されており砂丘に出ると与論島や沖縄本島を望むことができる。遺跡の上流には湧水（イシャゴ）があるが、遺跡付近では地下にもぐり水流を見ることがない。

遺跡の西側には緑の村運動緑地施設（通称尾子母海岸）や海水浴場がある。遺跡はサイクリング道路によって切られ、おそらく防風林の中まであるものと推測される。



塩津類ビ遺跡近景

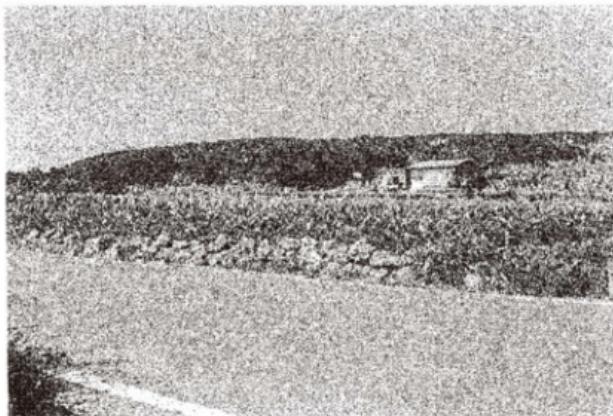
出土遺物は少なく、また図示できるものもなかった。

### (8) 泊り原遺跡

泊り原遺跡は沖永良部島の南々西、知名町大字屋子母字泊り原に所在し、太平洋に面した内陸部の遺跡である。遺跡地からは与論島や沖縄本島を望むことができる。

本遺跡は町道（通称小田線）の南北の二カ所にあり、おそらく小田線道路建設によって切られたものと思われる。遺跡の西側には湧水（イシャゴ）がある。南西側には緑の村緑地運動施設（通称屋子母海岸）や海水浴場がある。

北岸線にくらべ裾礁がよく発達しており入江も多く古代の生活文化に適した環境であると言える。



泊り原遺跡　近景



表 採 遺 物

泊り原遺跡では多くの土器片を探集することができたが、小片が多くまた、無文土器であるため図示できなかった。

色調は淡赤褐色を呈するものが主をしめ胎土には石英、サンゴ粒を含む。たまに、金雲母を含むものもある。焼成はやや粗である。

### (9) 川春遺跡

川春遺跡は沖永良部島の南南西、知名町大字屋子母字川春に所在し、太平洋に面したサイクリング道路沿いにある遺跡である。遺跡からは与論島や沖縄本島を望むことができる。

上流には湧水（イシャゴ）があり、遺跡付近では水流を見ることができず、直下の海へ流入している。西側には緑の村縁地運動施設（通称屋子母海岸）および海水浴場がある。



川春遺跡　近景

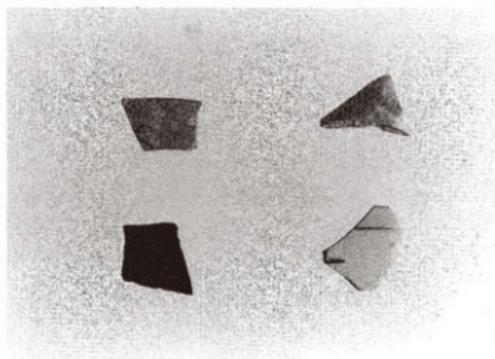


表 採 遺 物

#### (10) 屋子母遺跡

沖永良部島の南西部、知名町大字屋子母字植村・上坂で集落の中央部の小高い丘陵上にある大平武雄氏宅（元知名町長：以下大平氏と称する）内と北側の春田植武氏所有の畠地にある。

遺跡の東側と西側に大きな溜池があり、東側の溜池は集落の運動広場になっており、西側の溜池は現在も利用されている。

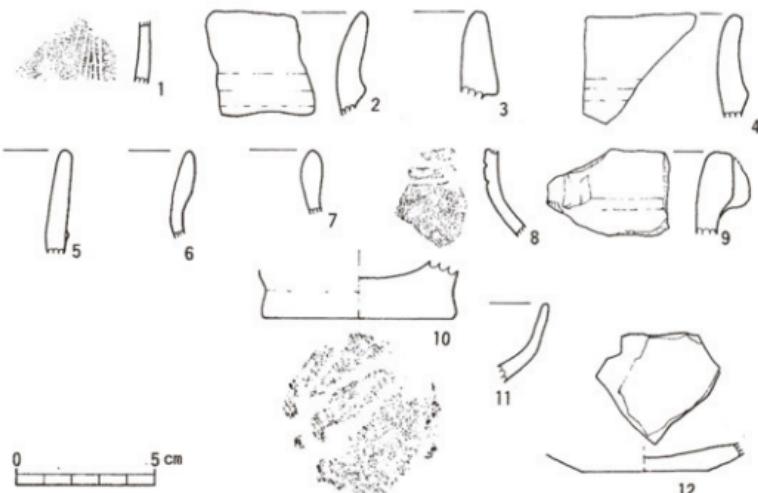
大平氏宅内の一帯は、豚舎新築の際に破壊されたものと推定される。また、大平氏正門前に昔、祭祀を行った所と思われるハミヤマ（神山？拝山？）の跡が残っている（大平氏談）。南側の畠地の部分は南北に傾斜しており遺跡内にプレハブ住宅が建っていて、多量の土器が散在していることが確認できる。



屋子母遺跡 遠景



屋子母遺跡 近景



屋子母遺跡 表採遺物

屋子母遺跡は、昭和32年九学会連合のゼネラル・サーヴェイによって発見された遺跡である。<sup>1)</sup>  
その際、土器断片と石器を採集している。土器は無文の小片で型式は不明とされ、石器は石斧  
と槌石であった。ここでは昭和60年5月採集した遺物の中で、図示できるものをまとめた。



屋子母遺跡 表採遺物

1は薄手の土器で上位から下位へ鋭利なヘラ状施文具によって5~6条の沈線を施している。器壁や文様より、面繩前庭式土器の可能性もあるが、これ1点のみの資料で断定するには資料が乏しい。色調は褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・サンゴ粒を含んでいる。焼成は良好である。2は断面三角形の貼り付け突帯を施した口縁部で、胎土に石英・サンゴ粒を多く含んでいる。3はやや肥厚した口縁部をもつもので、色調は褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・サンゴ粒を含んでいる。8は、壺形土器の頸部であり、内面に横位に2本の沈線が廻らされている。色調は赤褐色を呈し、胎土に石英・金雲母・サンゴ粒を含む。9は、突起物をもつ口縁部であり、外耳土器と思われる。色調は褐色を呈し、胎土に石英を多く含む。10は底部である。平底で、木葉痕がみられる。11・12は青磁である。

1) 河口貞徳「奄美諸島の先史遺跡」(九学会連合刊『奄美その自然と文化』所収) 1959

### (11) 当ノ増遺跡

当ノ増遺跡は沖永良部の南々西、知名町大字屋子母字当ノ増に所在する。遺跡は太平洋に面したサイクリング道路（屋子母～住吉間）沿いにある。

遺跡の海岸側には防風林がサイクリング道路沿いに植樹されており、砂丘に出ると与論島や沖縄本島を望むことができる。

遺跡や上流には湧水（イシャゴ）があるが、遺跡付近では地下にもぐり水流を見ることができない。

遺跡の南側には緑の村野外運動緑地施設（通称屋子母海岸）及び海水浴場がある。遺跡の範囲はサイクリング遺跡建設によって切られており、おそらく防風林の中まであるものと推測される。なお、この遺跡は所有者によって転地がえされ、多量の土器片が散乱しており破壊されたものと思われる。



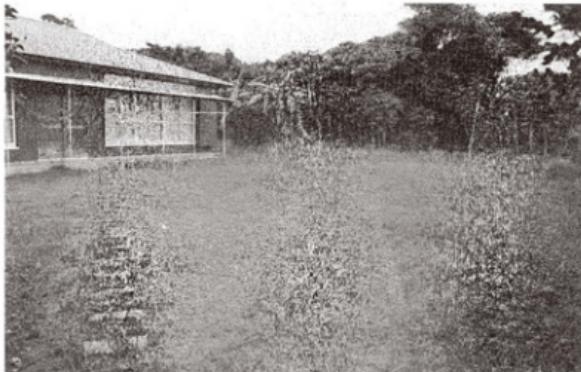
当ノ増遺跡近景

#### (12) 大津勘フーダトゥ遺跡

大津勘フーダトゥ遺跡は沖永良部島の南西部、知名町大字大津勘大納京子氏の宅地内にある内陸部の遺跡である。

遺跡地は南北に流れる谷間（屋子母～大津勘、大津勘～徳時）によって切られ、その中間部にある。

遺跡の北々東に町指定文化財水連洞があり、西側に四並藏神社がある。四並藏神社は1月20日、8月20日に奉納しており、奉納相撲大会が行われている。



大津勘フーダトゥ遺跡近景

### (13) 大津勘フバド遺跡

大津勘フバド遺跡は沖永良部島の南西部、知名町大字大津勘字フバドに所在する内陸部の遺跡である。遺跡付近は森林に覆われており、北々東の方向に町指定文化財水連洞がある。

遺跡地は屋子母～大津勘、大津勘～徳時間の谷間によって切られ、その中間部にあり、南北方向に傾斜した畠地でその面積は約2000m<sup>2</sup>と広い範囲である。

土壤は赤褐色土黒色土に分かれ、黒色土が遺物包含層である。遺物包含層が4ヶ所にある。



大津勘フバド遺跡 近景

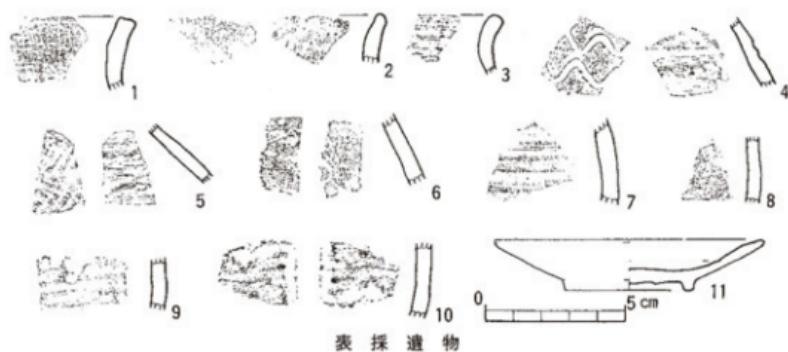


表 採 遺 物

大津勘フバド遺跡は、以前より多くの土器片が出土することで知られていたが、今回の分布調査においても多くの土器片を採集することができた。

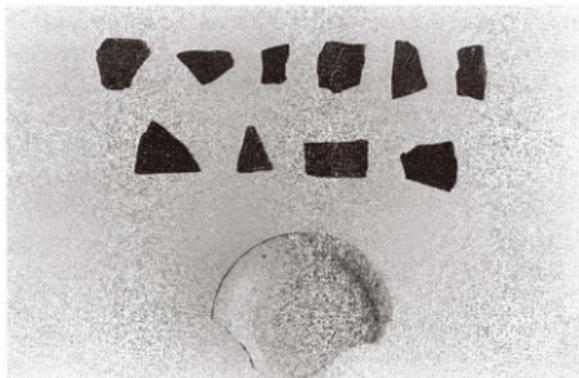


表 採 遺 物

多くの土器片を採集したが、図示できるものは、須恵質陶器と1点の白磁のみであった。1～3は小型壺の口縁部である。1は口唇部が平坦で内・外面とも沈線や段有等はみられなかつた。色調は青灰色を呈し、胎土には石英・サンゴ粒を含んでいる。4には、ヘラ描き波状文が施され、内面にはやや荒いナデ整形がみられる。5は、外面に稜杉文タタキ痕がみられ、やはり内面にやや荒いナデ整形がみられる。その他、外面は丁寧なナデ整形が施され、内面には水引き任上げ痕がみられるものもある。11は、白磁の皿で、高台から体部中位までは無釉で露胎である。内面の見込みには、重焼きの痕が残り、この部分は無釉となる。

#### (14) スセン當貝塚

スセン當貝塚は、沖永良部の南西部、知名町大字屋子母字スセン當に所在する砂丘遺跡である。遺跡から南方に与論島や沖縄本島が望むことができる。

遺跡は防風保安林の中にあり、屋子母海岸から住吉海岸へサイクリング道路が走っており、このサイクリング道路と陸地側の畠地とにはさまれた形になっている。

遺跡の上流では水流（湧川）が存在するが、遺跡付近では水流は認められず地下にもぐって海へ流れているものと思われる。



スセン當貝塚近景

本遺跡は昭和57年8月、高宮廣衛氏、小片丘彦氏、上村俊雄氏の分布調査によって発見された遺跡で、昭和57年8月に鹿児島大学法文学部考古学研究室（代表上村俊雄氏）によって発掘調査が行われ、5世紀代（古墳時代相当期）の新形成の土器「スセン當式土器」が発見され報告されている。それによると、スセン當式土器は、「口縁部はやや外反し、口縁部に横位または縦位に、三角あるいは平べったい凸帯をはりつけた土器で、奄美地方の兼久式土器の突帯文の影響を受けている。底部はあげ底で本土の成川式土器の影響をうけている。器形は甕または鉢形土器と推定される。奄美と本土の双方の特色を併せもっており、南九州と南島の文化交流があつたことを如実に示す資料である。」と記載されている。

貝製品として、貝匙、蝶蓋製貝斧、貝製垂飾品が出土している。獸骨では猪が出土した。

注）上村俊雄、本田道輝「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」鹿大考古2 1984

### (15) 神野貝塚

神野貝塚は沖永良部島の知名町大字大津勘字神野に所在する。遺跡は太平洋に面する臨海砂丘地に立地し同砂丘の北端は大津勘川によって切られている。この川は上流では水流が認められるものの、下流では地下にもぐり遺跡付近では大雨の時以外水流を見ることはできない。

遺跡は防風保安林の中にあり、与論島や沖縄本島を望むことができる。

昭和55年2月屋子母海岸から住吉海岸に至るまでのサイクリング道路建設工事中に高宮廣衛氏らによって発見されたもので、砂丘の後方部、つまり陸地側を開削されており、数10米にわたって遺物包含層が露出している。

サイクリング道路は遺跡のほぼ中央部を走っている。

また、遺跡付近の海岸は海食崖の後退が進んで砂浜となっており、北西～南島の海岸線に沿って、長さ数百メートル、最大幅数十メートルに達する日本最大のビーチロックが発達しており、現在も生成している事実が確認できる。



神野貝塚 遠景

本遺跡は昭和55年2月沖縄国際大学南島文化研究所（高宮廣衛氏）の分布調査によって発見された遺跡で翌年発刊された報告書では、大津勘長浜遺跡と紹介されているものである。  
注）高宮廣衛・島袋洋「沖永良部島の先史遺物」

沖永良部島調査報告書〈地域研究シリーズ No.2〉1981

高宮廣衛・玉城安明他「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その1）」沖国大考古7 1984

高宮廣衛・玉城安明・照屋孝・中村ゆりか・山内盛尚

「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報（その2）」沖国大考古8 1985

#### (16) 木部蘭迫遺跡

木部蘭迫遺跡は沖永良部島の西端、知名町大字住吉字木部蘭に所在し、太平洋に面した内陸部の遺跡である。

本遺跡地は中位段丘と低位段丘の境（60m～40m）の先端にあり、西方向に住吉港や住吉貝塚を望み遠くは与論島や沖縄本島を望むことができる。

遺跡付近は徳時～住吉、住吉～正名の谷によって切られている。遺跡の土壤は黄褐色を呈し土地所有者によると耕作する為山間部から土を運んできたと話している。



木部蘭迫遺跡 近景



遺物は少量であり、また原位置であるか疑問もあったが採集した遺物は土器片だけであった。土器は小片で図示できなかったが、色調は淡赤褐色を呈し、胎土に石英、サンゴ粒を含むもので焼成はやや粗なものであった。その他、青磁片、陶器片も採集された。

表 採 遺 物

### (17) 住吉貝塚

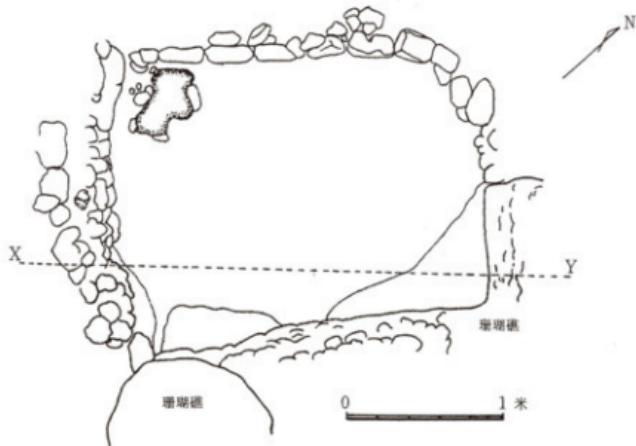
住吉貝塚は沖永良部島の西端、知名町大字住吉字金久の太平洋に面した海岸にあり、与論島や沖縄本島を望むことができる。

貝塚は昭和32年河川貞徳氏 九学会らによって、沖永良部島で発掘調査され、松下植安氏 煙地から木下池美氏煙地に至る広い範囲（約800m<sup>2</sup>）であることが確認されていた。しかし、知名町教育委員会が昭和60年5月、町単事業で分布調査を実施した結果、その範囲は、盛山健二郎氏煙地から外山克己氏煙地までおよんでいることが確認できた。

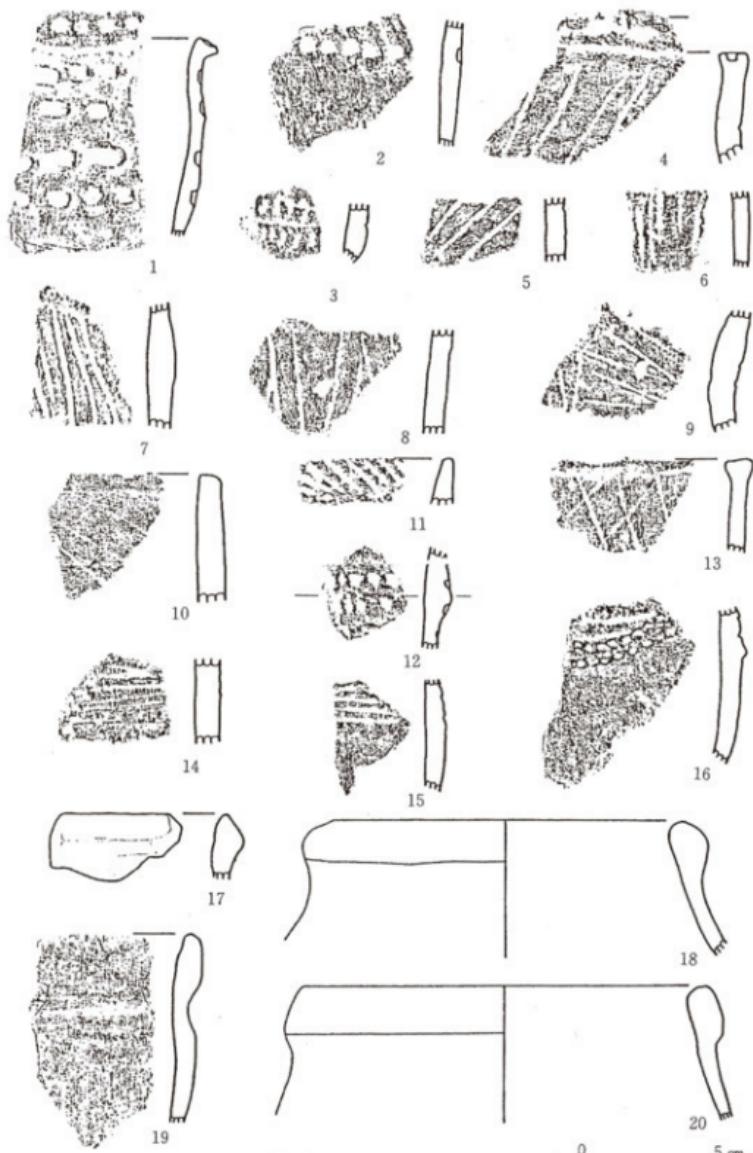
この広い遺跡の中央部をサイクリング道路が走っており、遺跡直下の海岸には泉の湧出があるが、水源に乏しいこの地域においては、貝塚生成の当時はこの泉から水をえたものであろう。



住吉貝塚 近景



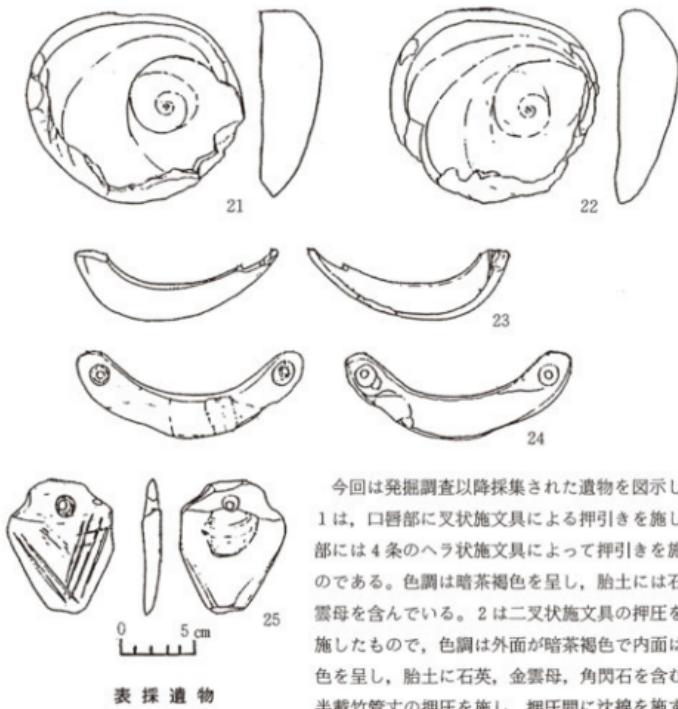
住吉貝塚発見住居址（河口貞徳「沖永良部島住吉貝塚の調査」九学会連合刊『奄美その自然と文化』より）



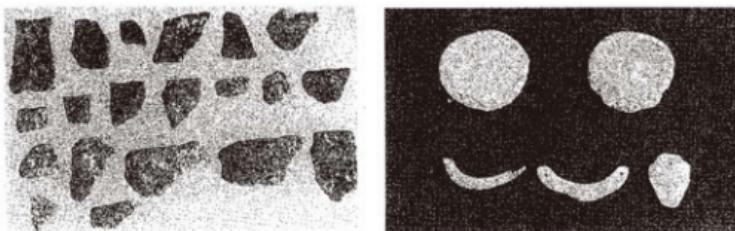
住吉貝塚表探遺物

0 5 cm

住吉貝塚は、沖永良部島で最初発掘された遺跡と同時に、住居跡を検出した遺跡としても著名である。<sup>1)</sup> 長径2.4m、短径1.8mの長方形に石を組んだ石組遺構である。報告書には、「内径は縦2.4m、横1.8mのはば矩形に石を組んでおり、北隅および北西側は石を並べ、外側にも小石をつめて壁を固め、東隅から、東南および西南側に至る側壁は自然の珊瑚礁の岩石面を調整したものである。そのためとくに東南および北東の一部の組石壁は著しく高くなっている。炉跡と考えられる焼土の部分が石組の区割内の西南隅に約40cm×35cmの範囲にあった。焼土の周囲には点々と小礫を配し、内部に木炭が残っていた。またこの部分の東隣りと北東壁よりに各々一ヶ所の焼土の部分がみられ、石組内部は周囲約20cm幅の部分を除いて一面に灰に覆われていた。」と記載されている。これは笠利町宇宿貝塚の遺構に類似し、住居跡と考えられている。この時には、遺物として、宇宿上層式土器、宇宿下層式、石斧、槌石、石皿、牙器、貝製品が出土している。貝層の中からはそれ以外に、獸骨、魚骨、貝類が出土した。獸骨は猪のみで、貝類は陸産マイマイが多く、わずかに海産貝がみられた。



今回は発掘調査以降採集された遺物を図示してみた。1は、口唇部に叉状施文具による押引きを施し、口縁部には4条のヘラ状施文具によって押引きを施したものである。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には石英、金雲母を含んでいる。2は二叉状施文具の押圧を横位に施したもので、色調は外面が暗茶褐色で内面は淡赤褐色を呈し、胎土に石英、金雲母、角閃石を含む。3は半載竹管文の押圧を施し、押圧間に沈線を施す嘉徳Ⅰ



住吉貝塚表採遺物

式Bである。

胎土に石英、金雲母を含み、色調は暗茶褐色を呈す。4は口唇部にヘラ状施文具によって押圧を一列廻らし、口縁部に継位の沈線を施す。嘉徳II式土器である。暗茶褐色を呈し、胎土に、石英、金雲母を多く含んでいる。5～10も同様である。10は口唇部はフラットに整形され、横位の沈線を口唇部直下に施し、斜位にヘラ状施文具によって沈線を施している。11は肥厚した口縁部をもち、短い沈線を斜位に施している。色調は短赤褐色を呈し、胎土には石英、金雲母、角閃石を含んでいる。12は三角突帯を貼り付け、上下に列点を施したものである。色調は淡赤褐色を呈し、胎土に石英と多くの金雲母を含んでいる。13は内外につき出しをもつフラットな口唇部をもつもので、口唇部直下にヘラ状施文具によって一条の沈線を廻らし、その下位に斜位に沈線を施し、網目状の文様を構成している。淡茶褐色を呈し、胎土に石英、金雲母を含んでいる。14、15は肩部に貼り付け突帯を一条廻らし、突帯上に連点文を施している。その上位に鋭いヘラ状施文具による沈線を横位に数条施しているもので、面繩西洞式土器と思われる。胎土に少量の石英、金雲母を含む。16は断面円形の弧状の貼り付け突帯を有し、上下に鋭いヘラ状施文具による刺突を加え、上位に沈線を施すもので喜念I式土器である。胎土には石英と多くの金雲母を含む。焼成はやや粗である。17～20は断面三角およびカマボコ状の口縁部をもつもので宇宿上層式と思われる。

21、22は螺旋製具斧である。重量は、195gと197gである。23は、ゴホウラ製の具輪で破損品である。内縁および表面に丁寧な研磨が施されている。残存部は全体の1/4程度で、幅は約2cmである。24はゴホウラと思われる貝を素材にした装飾品である。内縁および表面に比較的丁寧な研磨が施されているが、表面にはまだ自然の凹部も残っている。完形品で両端に穿孔を施している。

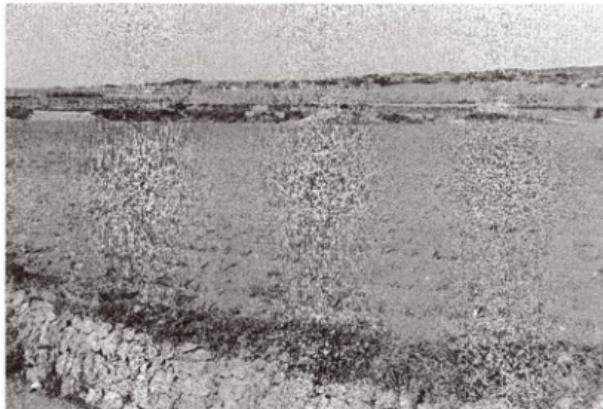
### (18) 友留遺跡

友留遺跡は、沖永良部島の西端、知名町大字住吉字友留に所在し、太平洋に面した先端の海岸にあり、与論島や沖縄本島を望むことができる。

遺跡を取りまくようにサイクリング道路が走り谷間（凹地）を境にして、方に住吉貝塚を見ることができる。

上流には昇竜洞、住吉暗川の水流が認められ、ものの遺跡付近では地下にもぐり水流を見ることができず、海へ流入しているものと思われる。

本遺跡は、昭和60年5月、町単事業で知名町教育委員会が分布調査を実施した際に発見されたもので、東南方向に幅約1.5メートル、長さ約8メートル、深さ約30センチ開削してあり土器が点在し遺物包含層を確認することができた。この開削はおそらく車輛の出入に利用されたと思われるが、現在は埋戻ししてある。



友留遺跡　近景

住吉貝塚の北側で谷ひとつを隔てた地である。赤褐色土層の中に暗茶褐色を呈する包含層が確認でき、土器の散布状態もみられるが小片の為図示できなかった。

### (19) 手殿遺跡

手殿遺跡は沖永良部島の西部、知名町大字住吉字手殿に所在し、集落のほぼ中央部に位置する内陸部の遺跡である。

遺跡地は中位段丘と低位段丘の標高60メートル～40メートルの平坦な畑地で太平洋に面しており、南方に与論島や沖縄本島を望むことができる。

遺跡付近には住吉遊園地があり、その一角に青少年自立自興館がある。遺跡は海岸線へ通ずる道路によって切られ、南側に大戸神社がある。この大戸神社は現在、旧暦、月20日、8月20日の年2回祭りされている。また、東北側には、島最大の住吉暗川（クラゴウ）があり島民の生活用水や農業用水として利用されている。

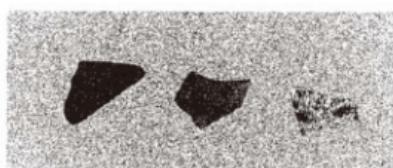


手殿遺跡　近景

手殿遺跡は、昭和60年5月の分布調査で発見された遺跡である。

探集された遺物は3点である。小片のため図示できなかった。一点は口縁部で色調は暗茶褐色を呈し、胎土にサンゴ粒が多く含まれる土器である。その他、青磁、染付が探集された。

表 採 遺 物



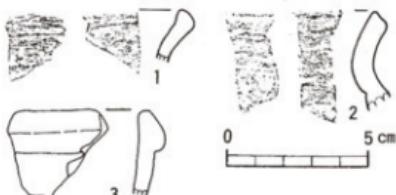
### (20) 正名内間遺跡

正名内間遺跡は沖永良部島の西端、知名町大字正名字内間に所在し、太平洋に面した内陸部の遺跡である。

本遺跡は正名集落のはば中央部に位置し中位段丘を低段丘（60m～40m）の平坦な畑地にある。小米～田皆間の県道を南へ15mの地点でそばに首祭祀したところが残っている。現在の祭祀は行われていない。



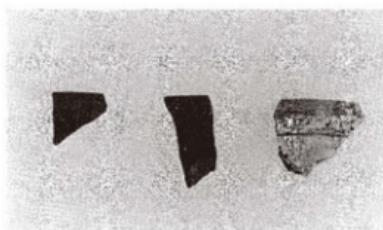
正名内間遺跡 近景



表採遺物

正名内間遺跡では、多くの土器を採集できたが、図示できるものは少なかった。

1と2は須恵質陶器（頬須器）の口縁部である。どちらも小型壺形土器の口縁と思われる。色調は青灰色を呈し、胎土に石英・サンゴ粒を含んでいる。3は、玉縁口縁をもつ白磁の口縁部である。

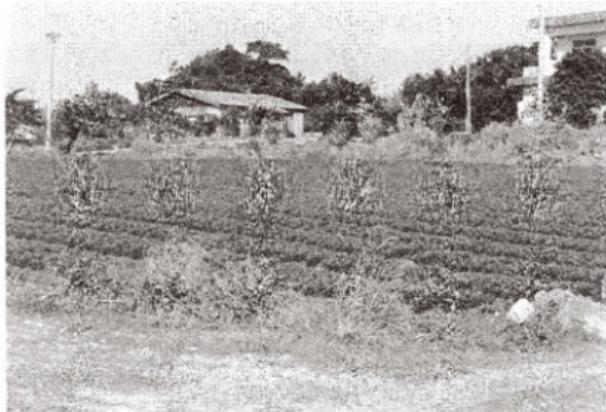


表採遺物

(21) 志良辺当遺跡

志良辺当遺跡は沖永良部島の西端、知名町大字正名字志良辺当、128番地の2に所在し、中位段丘と低位段丘(60m~40m)の畑地に位置する内陸部の遺跡である。

本遺跡は正名集落の北西部で与論島や沖縄本島を望むことができる。この地域は乏水地域で南岸線に湧水が一ヶ所あり、その当時はこの湧水を利用していたであろう。



志良辺当遺跡 近景

(22) 田皆伊美畑遺跡

伊美畑遺跡は沖永良部島の西北西、知名町大字田皆字伊美畑に所在し、東支邦海に面した内陸部の遺跡である。

遺跡付近には3ヶ所の溜池があり、最近までは農業用水としてこの溜池が利用されていたが、現在は枯れて利用されていない。

本遺跡の北側には奄美十景指定公園で知られている田皆岬がある。この田皆岬はカルスト地形が完全に地表に露出し見事な景観を呈する。

また、昭和40年代頃まではトラバーチンの採掘場があり、国会議事堂や大手のデパートの壁材として輸出されていたが、現在は採掘されていない。

東側には九州電力の風力発電所がある。

現在、遺物の散布は認められないが、以前、摩製石斧が採集されている。



田皆伊美畑遺跡

### (23) アンギム遺跡

アンギム遺跡は沖永良部島の西北部、知名町大字下城字アンギムに所在する。

本遺跡は東支邦海に面し北側に徳之島を望むことができる。遺跡地は断崖絶壁の先端の畠地に位置し海食崖が連続してよく発達している。

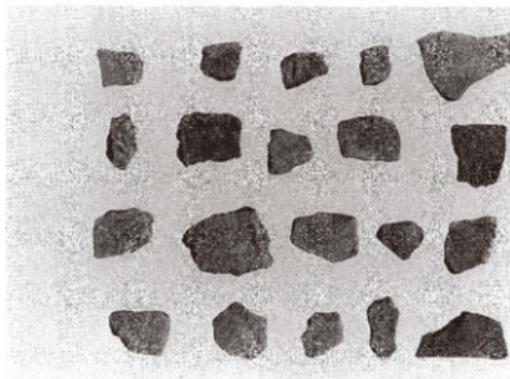
崖の高さも海面から30~40mあり、これはモンスーン（季節風）の影響を受けるためである。

遺跡は直下の沖泊海水浴場へ通ずる急傾斜の道路によって切られた形になっており、道路端には土器片の散布が見られる。

海水浴場は東西に数百米の砂浜があり、町指定文化財「アダンの自然林」が自生している。



アンギム遺跡 近景



アンギム遺跡は、昭和60年5月の分布調査で発見された遺跡で、広範囲に土器小片が散布していた。図示することはできなかったが、淡褐色を呈し、胎土に金雲母・サンゴ粒を含んでいるものが多い。また、1点であるが、類須恵器も採集されている。

表 採 遺 物

#### (24) 永良部洞穴

永良部洞穴は知名町の西南部の瀬利観スマン辻にあり、大山々頂より南約0.7km、南部海岸線より約3.6kmの内陸部に位置する。大山周辺に数多く見られるドリーネの一つで付近にいくつかのドリーネを見ることができる。東側に沖永良部ゴルフクラブがある。

遺跡地は森林に覆われ、点々と石灰岩が露出しており、北東の方向へ開口している。入口幅15m、高さ7mで地下水の流れに沿い西方向へゆるい勾配で下り約400mで出口に達する。

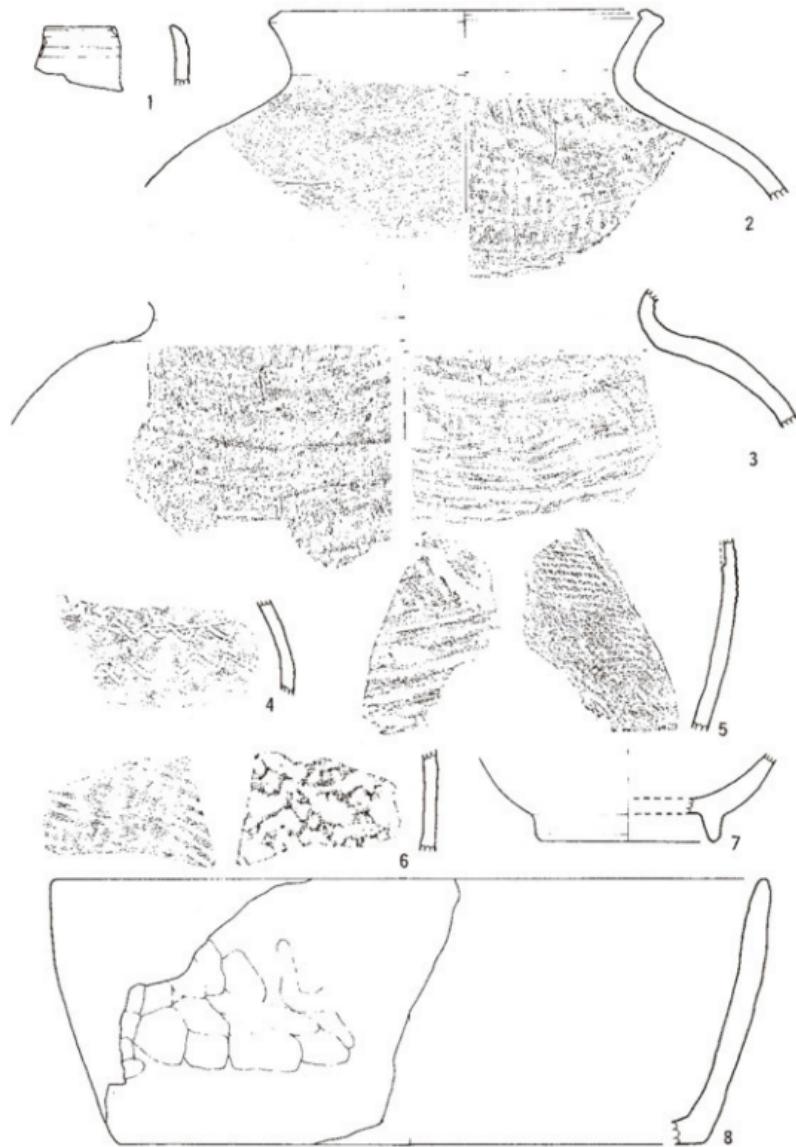
入口と出口の高低差少なく、空気の動きがあまり感じられない。洞内は入口付近の鍾乳石の発達は良いか、中央部南にある小支洞の鍾乳石は損傷したものが多いため、洞内鍾乳石・石筍群は特に巨大なものはなく平均している。



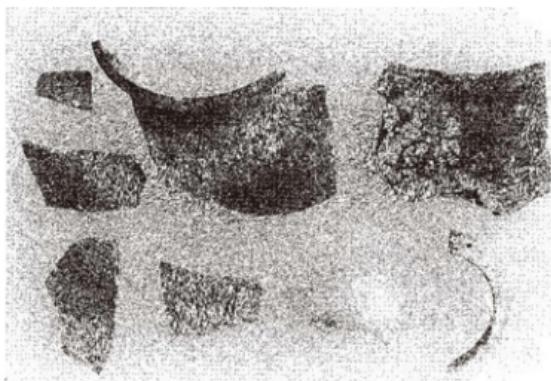
永良部洞穴入口部

注<sup>1)</sup>  
永良部洞穴の入口部での遺物の発見は紹介されていたが、今回は約50m内部まで遺物の散布が確認された。

1は玉縁口縁となる塊である。口縁部はわずかに内弯する。口唇部は断面が三角形を呈す。胎土には石英やサンゴ粒を含む。焼成は硬質緻。色調は灰色を呈す。外面は水引き調整で、内面はナデ整形によって仕上げている。2は、口径25.6cmを測る大壺の口縁部である。口縁部は直口し、口唇部にかけてやや外反する。口唇部は、わずかに肥厚しながら平坦に終る。肩部は、丸味をもって張り胴部へ続く。口縁部外面の整形は、ナデ状の整形でわずかに条線が残る。口縁部内面は、丁寧なナデ整形である。頸部下から胴部の内面は、幅の狭い平行タタキ目で仕上げている。3は、生焼けの大壺である。肩部は、張り、やや丸味をもって胴部へ続く。口縁部外面の整形は、ナデ状の整形でわずかに条痕が残る。肩部から胴部にかけては、ヘラ状整形で



永良部洞穴採集遺物



採集遺物

あり、2cm程度の稜線が残る。口縁部内面は、丁寧なナデ整形であり、肩部から胴部内面もナデ整形である。4には、ヘラ描き波状文が施され、内面にはやや荒いナデ整形がみられる。色調は青灰色を呈し、胎土には石英・サンゴ粒を含んでいる。5は平行タタキ痕が施され、その上からナデ整形を施している。6は外面には縦横の平行タタキ痕がみられ、内面にはやや荒い格子目文が施されている。いずれも、色調は青灰色を呈し、胎土には石英・サンゴ粒が含まれる。7は、高台付の白磁碗である。8は、口径25cmを測る鉢である。色調は暗茶褐色で、胎土に滑石を多く含んでいる。製作技術は滑石製品と変らず、斜位にノミ痕が認められる。<sup>注2)</sup>滑石製であるが同様のものが、沖縄県久米島ヤジャガマ遺跡から出土している。

注1) 上村俊雄「沖永良部島の考古学」鹿大考古2 1984

注2) 当真嗣一氏教示

## 第 5 章 用 語 解 説

### 遺 跡

過去、人類の生活した跡が残っている場所。古代人の住居の跡、貝塚、古墳など広く指す。また、土器や石器等の落ちている場所もある。

### 遺 物

過去、人類の生活した道具等であり、土器や石器等のことである。

### 「てあじ」 豎穴住居跡

地表面下に深さ60~70cmの豎穴を掘り、その底を住居床面とし、それを被うように屋根をふきおろしたもので、縄文時代から平安時代ごろまで残っています。発掘でみつかるものは、住居床面に柱をたてる穴を5~6個掘り、溝や炉などがついているものもあります。

### 貝 塚

古代人が食べた貝殻が捨てられ堆積したところです。貝塚には、貝殻ばかりでなく、鳥や獣、魚などの骨や生活用具の土器、石器、骨角器なども含まれています。貝塚では、貝殻の石灰分が、水と混ざりると、くさりやすい骨をながく保存してくれるため普通の遺跡では残りづらい人骨や骨角器が見つかり、当時の生活を知る手掛かりになります。また、貝塚の貝の種類などを詳しく調べることによって、その当時の気候や環境などを知ることもできます。貝塚は、ひとくちにいえば、大昔に海辺のムラにできたごみすて場であり、当時の人々の生活や社会を知るために、またとない宝の山であります。日本の貝塚は、縄文時代のものが多く、九州では弥生時代のものも多くあります。奄美地方では、弥生時代以降にも貝塚がよく発達しています。

### 「かんなわげんていしき」 面縄前庭式土器

大島郡伊仙町面縄第4貝塚前庭部出土の土器を標式とする。器形は口縁部と、頸部、胴部の壺に、それぞれ一条の細い凸線を廻らしたもので、凸線にはヘラによる鋭い刻目が施されている。文様は数条の沈線を単位として、凸帯文間に描かれ、凸帯下にも同様の文様が、胴部一杯に施されて底部付近に達している。口縁部は外反し、頸部でしまり、凸帯下の胴部が張り出した變形土器である。

### 面縄西洞式土器

大島郡伊仙町面縄第4貝塚西側洞穴出土の土器を標式とする。器形は、口縁部がやや外反し、頸部でしまり、凸帯以下が張り出して變形土器となる。口縁部と頸部、胴部の壺にそれ

それ1本の刻目凸帯を廻らす。その凸帯間に鋭いヘラ状施文具によって沈線を施している。

#### 面縄東洞式土器

大島郡伊仙町面縄第4貝塚東側洞穴出土の土器を標式とする。口縁外面に爪形または三角形にとがったヘラ等で、籠目状の文様を、押引き手法を用いて施文している。平底深鉢で、口縁部は外反し、わずかに肥厚して文様帯をつくる。縄文時代後期の市来式土器と共に、その影響を受けた土器も見られる。

#### 喜念I式土器

大島郡伊仙町喜念貝塚出土の土器を標式とする。縦または横のみみずばれ状の隆起線に沿って刺突点を施した土器で、丸底の壺形が多い。

#### 嘉徳式土器

大島郡瀬戸内町嘉徳遺跡出土の土器を標式とする。口縁部がわずかに肥厚して文様帯をなし、ヘラ書きの平行線の間に連続刺突文を施すもので、四個の低い山形隆起をもつ波状口縁で平底深鉢の土器である。縄文時代後期初頭の時期に相当する。

#### 宇宙上層式土器

大島郡笠利町宇宙貝塚出土の土器を標式とする。aとbに分かれ、aは口縁部が肥厚して断面が三角形または蒲鉾状をなす壺形・甕形の土器で、丸底と平底がある。bはaと同様の器形であるが口縁部に沈線を部分的に、縦に2ないし3本施したものである。

#### 差久式土器

大島郡伊仙町面縄第3貝塚出土の土器を標式とする。器形は、口縁部は外反し、肩部の張った平底の甕形土器である。頸部に刻目突帯を1条廻らし、口縁部との間に2条で構成された鋸歯文を沈刻したものや、口縁部と頸部の突帯を縦の刻目突帯でつなぐもの、口唇部に刻目を施したもの、頸部の突帯が部分的に施されたもの、いろいろなバリエーションがある。底部には木葉痕が施されたものが多いのも特徴である。

#### 轟式土器

熊本県宇土市轟貝塚出土の土器を標式とする。縄文時代前期の土器。表裏面ともに貝殻条痕を横走させ、みみずばれ状の微隆起線文や連点文を施した尖底または丸底の土器。九州全域に分布し、中甫洞穴からも発見され、沖縄県でも同様の発見がある。

### **曾畠式土器**

熊本県下益城郡城南町曾畠貝塚出土の土器を標式とする。縄文時代前期の土器。胎土に滑石を含むものがあり、器壁は薄く、丸底深鉢または、ビーカー形の器形の土器で、文様は刻線幾何学文を、外面と口縁内面に施す。九州西部に分布し、南西諸島でも轟式土器とともに発見されている。

### **市来式土器**

市来町川上貝塚出土の土器を標式とする。縄文時代後期の土器。平底深鉢で口縁に降帯をめぐらし、この部分に目殻压痕・爪形・凹線等の文様を施し、器面を貝殻条痕によって調整している。器形には、波状口縁・平坦口縁の他、丹塗りの台付皿形土器、素文の深鉢形土器もあらわれる。

### **石 斧**

打製石斧と磨製石斧に分けられる。安山岩・砂岩・玄武岩等いろいろな種類の岩石を用いている。用途はハンマー具・切断打割具・獵具・土堀り具など日常生活の用具として利用される。縄文時代に盛行したが、部分的・局部的磨製石斧は旧石器時代から使用され、縄文・弥生時代へと継続している。

### **石 剣**

矢の先につけた石器で、いわゆる「矢じり」のことである。縄文時代に多くみられ、弥生時代には、磨いたものもみられる。狩猟や武器に使用していた。

#### **（参考文献）**

河口貞徳「奄美における土器文化の編年について」鹿児島考古 9・974

南日本新聞社編『鹿児島大百科事典』1981

## 第 6 章 知名町の考古学文献目録

- 河口貞徳「奄美諸島の先史遺跡」(九学会連合刊『奄美その自然と文化』所収) 1959  
上村俊雄「鹿児島県沖永良部島の先史時代(上)」 古文化談叢 2 1974  
高宮廣衛「沖永良部島における先史遺跡調査概要」 南島文化研究所所報 9 1980  
高宮廣衛・島袋洋「沖永良部島の先史遺物」  
    沖永良部島調査報告書(地域研究シリーズNo 2) 1981  
知名町『知名町誌』 1982  
上村俊雄「沖永良部島の考古学的調査」 南日本文化16 1983  
河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望「中甫洞穴」 鹿児島考古17 1983  
上村俊雄「沖永良部島の考古学」 鹿大考古 2 1984  
上村俊雄・本田道輝「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」 鹿大考古 2 1984  
河口貞徳・本田道輝「中甫洞穴」 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1984  
河口貞徳・本田道輝「中甫洞穴」 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1985  
戸崎勝洋・宮田栄二「赤嶺原遺跡」 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1985  
高宮廣衛・玉城安明他「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報(その1)」 沖国大考古 7 1984  
高宮廣衛・玉城安明・照屋孝・中村ゆりか・山内盛尚  
    「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報(その2)」 沖国大考古 8 1985

**知名町埋蔵文化財分布調査概報**

**知名町文化財報告書(5)**

発行日 昭和61年3月31日

発 行 知名町教育委員会

大島郡知名町知名307番地

印 刷 有限会社朝日印刷

鹿児島市上荒田町854番1